



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
 京都大学医学部人間健康科学科



救命講習会の様子 (P15 参照)

目次

○学科長メッセージ	学科長 足立 壯一… 2	検査技術科学コース (科学技術人材育成コンソーシアム構築)	特定准教授 福間 真悟…11
○受験生と高等学校進路指導者に向けたメッセージ ~特色入試と一般入試によって多彩な学生が集い、切磋琢磨し、融合することを期待して	教務・教育委員会委員長 黒木 裕士… 3	看護 (AMED)	特定助教 小島 諒介…12
○中高生への入試プロモーション活動	教授 木下 彩栄・助教 岡橋さやか… 4	共同研究講座 (味覚分子構造科学講座)	特定准教授 荒木 望嗣…12
○京都大学交流会	教授 山田 重人… 4	共同研究講座 (味覚分子構造科学講座)	特定助教 岩田 浩明…13
○退任等挨拶		○救命救急講習会報告	……………14
元看護科学コース	教授 我部山キヨ子… 5	○平成 28 年度健康科学市民公開講座	……………15
元看護科学コース	講師 内海 桃絵… 5	○2016 年度オープンキャンパス	……………16
○新任等挨拶		○人間健康科学系専攻から博士が 10 名誕生しました。	……………17
看護科学コース	教授 奥野 恭史… 6	○ボルティモア留学記	……………22
看護科学コース	教授 恒藤 暁… 7	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科 平成 29 年度入学試験結果及び 平成 28 年度修了・卒業者数	……………23
看護科学コース	教授 古田真里枝… 7	○平成 28 年度卒業生の進路調査結果	……………25
リハビリテーション科学コース	准教授 池添 冬芽… 8	○人事異動	……………26
看護科学コース	准教授 白井 由紀… 9	○日誌	……………27
リハビリテーション科学コース	准教授 谷向 仁… 9	○あとがき	……………28
看護科学コース	助教 清水 彬礼…10		
看護科学コース	助教 片山 泰佑…10		
看護科学コース	助教 井沢 知子…11		

学科長メッセージ

足立 壯一

人間健康科学科では、日本と世界の医療の将来を担う意欲のある学部学生の入学を歓迎しており、そのような学生に合わせた教育を行っています。

人間健康科学科および、その大学院の人間健康科学系専攻では、京都大学医学部附属病院の高度先進医療を担い、看護師、保健師、助産師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士として、特に研究を推進し、指導的役割を果たす高度医療専門職としての研究と教育が推進されています。国立大学改革において、日本における京都大学の立ち位置を踏まえて、平成 25 年度に「世界トップレベルの先端医療技術の開発および臨床フィールドにおける実践の追及を通じ、世界レベルの研究を牽引する研究者の養成」のミッションが再定義されています。これは、専門職を含めた人間健康科学系専攻において、世界のトップレベルの研究と、研究者の養成を目指すものです。

上記のミッションを達成するため、昨年度の入試から大改革を行いました。高度医療専門職や世界レベルの研究者の育成の素地を学部段階からつくり、大学院への進学率を向上させるため、平成 29 年度から学生定員を 100 名に変更し、現行の 4 専攻を「先端看護科学コース」、「総合医療科学コース」、「先端リハビリテーション科学コース」へ再編し、学部・大学院を通した一貫教育を実施します。改組後の入学定員 100 名のうち、一般入試による入学定員を 70 名とし、現行の専攻別入試を一括入試に変更することにより精鋭化しました。各コースへの進路振分けは、2 回生後期に学生の自由選択とし、特色入試による入学定員を現行の 16 名から 30 名（看護 20 名、理学 5 名、作業 5 名）に増員し、明確な目的と熱意を持った学生の受入を促進します。また、平成 30 年度からは、先端看護科学コース、先端リハビリテーション科学コースでは、2 年次学士入学も導入予定です。

社会はグローバルのレベルでも、また日本の国内でも急速に変化しており、高齢化社会を含めて、さまざまな問題が生じています。科学技術の進歩は急速でダイナミックであり、それらに合わせて医療は急速に変化しています。そのような社会と医療の変化に対応して、独創的な新規医療の科学分野を開拓する研究と、研究者の養成が必要です。先端看護科学コースでは、高度実践研究者養成プログラムを、先端リハビリテーション科学コースでは、先進・融合リハビリテーション科学講座を新設し、修士・博士一貫教育を行うとともに、高度実践看護師、専門理学療法士、専門作業療法士を養成します。また、新たな研究領域として、先端看護科学コース、先端リハビリテーション科学コース、総合医療科学コースを融合するビッグデータ医科学講座を新設しました。ビッグデータ医科学は、ゲノム医療に基づく個別化医療と、そのために必要な新たな早期診断手法の研究開発を強力に加速するために必須の領域です。この領域の研究開発や人材育成の具体的な取組は、我が国ではこれまで皆無に等しく、米国に大きく遅れをとっています。人間健康科学科では、バイオインフォマティクス・ビッグデータ科学・ゲノム医科学・医療情報学・医療統計学に総合的に精通した指導者によって、体系化したカリキュラムが検討されています。本学科から輩出される人材が、医療ビッグデータ解析や臨床ゲノム解析に基づく医療や研究開発プロジェクト、人材育成プログラムで活躍し、我が国のみならず世界を牽引していくことが期待されます。

少子高齢化、グローバル化、医療の高度化を鑑み、京都大学人間健康は、高度医療専門職養成、新たな医療専門職育成、新たな研究シーズ発掘、世界レベルの研究者育成を行います。

受験生と高等学校進路指導者に向けたメッセージ

～特色入試と一般入試によって多彩な学生が集い、切磋琢磨し、融合することを期待して

医学部人間健康科学科・教務・教育委員会委員長 教授 黒木 裕士

医学部人間健康科学科では平成 29 年 4 月 1 日に「組織再編」が行われ、いよいよ新たな教育カリキュラム・プログラムが提供されることになりました。

この組織再編と新しい教育カリキュラム・プログラム提供は、文部科学省による大学のミッション再定義により数年前から計画を練ってきたものですが、従来の看護学専攻・検査技術科学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の組織と教育の枠組みが変わる大きな改革になります。看護学専攻は先端看護科学コースになり、理学療法学専攻と作業療法学専攻は先端リハビリテーション科学コースとしてひとつになり、それぞれ理学療法学講座、作業療法学講座となりました。また検査技術科学専攻は、いくつかの新しい領域を創設して総合医療科学コースとして生まれ変わりました。

各コースで育成する人材は、ひとことで言うと、世界と伍して活躍するリーダーです。国際的視野を備えた高度実践研究者や医療専門職、また総合医療科学領域の次代を担う専門家の人材です。

このリーダーを育成するためには充実した教育カリキュラム・プログラムが必要であり、教員がそれを提供する訳ですが、この教育カリキュラム・プログラムを実りあるものにするためには、入学者自身が自学習し、互いに切磋琢磨することが求められます。

そこで教務・教育委員会ではアドミッション・ポリシーで入学者受入れの方針を定め、特色入試と一般入試で、こうした資質のある受験生を募集しています。

すでに平成 28 年度入学者から始まっている特色入試は、京都大学全学をあげて、これまでにない方法で入学者を募集する入試制度で、各学部・学科で様々な方法により実施されています。

本学科では、この特色入試によって、先端看護科学コース 20 名、先端リハビリテーション科学コースの理学療法学講座 5 名、作業療法学講座 5 名を募集します。募集する人は、学問に対する探究心と人間に対する深い洞察力を備えた人、理系だけでなく人文科学系も含めた幅広い教養を指向する人、従来の健康へのアプローチに創造的・批判的に対峙できる人などです。現役の高等学校 3 年生や前年度高等学校を卒業した人で、看護科学、理学療法学、作業療法学に強い関心があることが受験の条件となります。

一般入試の募集人数は 70 名です。この一般入試で入学した人は、入学時にはコースを決めず、同じカリキュラムで医学に関する基礎的な科目を履修します。そして入学の 1 年半後に、本人の希望にもとづいて、先端看護科学コース、先端リハビリテーション科学コース、または総合医療科学コースのいずれかに進むことを選びます。

どちらの入試においても、まずは願書を提出していただく必要があります。特色入試は一般入試とは異なり本学科の出願時期は 10 月になります。一般入試は 1 月末から 2 月初旬です。

これらの特色入試と一般入試によって、個性的で優秀な、多彩な学生が集い、融合し、京都大学医学部人間健康科学科をより活性化していくことを教務・教育委員会として強く期待しています。

中高生への人間健康科学科プロモーション活動

教授 木下 彩栄

助教 岡橋 さやか

特色入試の開始と人間健康科学科の組織再編に伴い、本学科の教育・研究内容を幅広く知っていただく必要があるという認識のもと、2016年度は本学科の授業や研究を紹介する様々な中高生向けのイベントを、先端看護科学コースと先端リハビリテーション科学コース（作業療法学講座）を中心に開催しました。11月の「女子中高生のための関西科学塾」では、看護と作業から二つのプログラムを提供し、女子高生の方に研究や医療について体験していただく一助としました。看護では、食事摂取に伴う体の反応について学び、食後の血糖値の変動を体験し、また血球の観察なども行いました。作業では、自己準拠効果に関連する短期記憶課題を行った後、脳活動を可視化できる近赤外分光法（NIRS）を用いて前頭葉の活動を記録・分析するミニ実験を行い、先端機器を用いたリハビリテーションの可能性について学びました。なお、学校単位での見学会として2017年5月までに訪問された学校は、四天王寺中学校、奈良県立畝傍高等学校、大阪桐蔭高等学校、静岡県立掛川西高等学校であり、今後は、立命館中学校、聖母学院中学校、京都府立洛北高等学校、京都府立山城高等学校、兵庫県立兵庫高等学校などからの訪問が予定されています。

さらに、新しい入試制度と本学科の魅力を周知するために、関西、東海、北陸、中国地方の数十の高校へ本学科教員が訪問し、進路指導の先生と直接お話しする機会を得ました。今後も引き続き希望のある学校への学科見学会を設けるとともに、医療専門分野の出前講義や人間健康科学科を志願する中高生との懇話会も検討したいと考えています。世界をリードする医療従事者・研究者の人材リクルートと育成にこれからも尽力してまいります。

京都大学交流会

教務・教育委員会委員 教授 山田 重人

近年、京都大学では、全国の優秀な高校生を集めることを目的に、全国各地で大学をアピールする機会を持つようにしております。「京都大学交流会」は高等学校等の先生方との意見交換を目的としたもので、ここ数年で規模を拡大し、昨年（2016年）は7月から8月にかけて、京都を含む全7会場（京都・仙台・札幌・福岡・名古屋・東京・広島）で行われました。特に昨年は、本学科にとっては入試制度が変わることもあり、また前年から始まり今回で第2回目となる特色入試をアピールし志願者増を狙うため、全会場に足立教授（学科長）及び山田（教務教育委員）が足を運びました。一括入試のシステムと人間健康科学科が目指すもの、特色入試の仕組みと求める学生像などを講演し、各会場とも、高校の進路指導の先生や予備校の担当者などの方々に熱心に聞いていただきました。また会の終了後も積極的な質問や情報交換などいただき、有意義な時間を過ごすことができました。全会場に代表を派遣した学部学科は人間健康科学科だけだったこともあり、大変に目立っておりました。その成果かどうか、本年度の入試では、特色入試には出願者数が2.5倍増、そして一般入試に至っては志願倍率4倍を超え第1段階選抜を実施するほどとなりました。この結果に油断することなく、本年度も7月から9月にかけて昨年と同じ全7会場に足を運び、さらに優秀な学生を集めるべくアピールをしていく予定です。





退職のご挨拶

元看護科学コース 教授 我部山 キヨ子

19年間勤めた京都大学を離れて、早3ヶ月が過ぎようとしています。鴨川を挟んですぐのところに住んでいますので、京都大学へは通勤時間はほとんどかからない非常に恵まれた環境でした。但し、これを長く続けたせいで運動不足がたたり、最終年にはロコモティブシンドロームに陥っておりました。現在の勤め先への通勤時間は2時間弱ですが、歩く距離は乗り換えのところだけですから、あまり運動にはなっていないのですが、随分健康になったように思います。新幹線とローカル線に乗る時間は1時間弱です。車窓からの景色は目に優しく、中継駅でも心地よい風が吹き、まさしく田園風景そのものです。京都大学では夜更かしの生活でしたが、今は早起きの生活に一変しています。

現在は大垣女子短期大学の学科長と、看護学部立ち上げという仕事をしています。短大に行くとは事務職員が待っていますので、毎日まじめに朝早く通勤しています。学部設置に対するニーズ調査も大がかりで、近隣県の高校の約100校に行っています。調査には学長・副学長・教員・事務職員など多くの人々が協力してくれております。国立大学ではこれほどの大がかりな調査をしませんでしたが、私学では文部科学省に要求されているということでしょうか？設置計画書も事務職員の多くの人々に分担をして頂きながら、手がけています。私も昔は若かったので設置計画書などは一人でほとんどを担っていましたが、今は体力的に無理が利かなくなったことや、多くの人に関わって作り上げるほうが望ましいということ、この年になって気づいたということだと思います。教職員ともに非常に協力的で、やりがいを持ちながら楽しく働いてくれているのが感じられ、私としてもあまり中途半端なことはできないと感じております。学部設置を成し遂げ、内容充実とスムーズな運営ができるように、努力をしていきたいと思っています。

今年の4月から、京都大学には非常勤講師で行かせて頂いております。一人の教員として学生に対峙させて頂き、改めて学生の優秀さと真摯さが伝わってきて、今まで本当に恵まれた教員生活をさせて頂いたと感じました。今年から組織改革の第一期生が入学してきて、新たな一步を踏み出されたことと思います。京都大学は特に、より優れた学生を集め、より優れた教育・研究をすることを常に期待されていますので、これからも継続的な変革を求められると思います。そのことは非常に教職員にとって大変なことですが、期待に添う高みを目指して邁進して頂きたいと願っております。人間健康科学科及び同専攻の発展を祈念しております。

退職のご挨拶

元看護科学コース 講師 内海 桃絵

平成28年5月に京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コースを退職しましたので、ご挨拶申し上げます。京都大学には平成22年4月に赴任し、約6年間、所属させていただきました。

初めての教育現場でしたが、先生方にご指導いただき、学生さんの新鮮な反応に驚いたり、励まされたりしながら、教育に携わることができました。演習や実習では附属病院の看護師さんに大変お世話になりました。また、いろいろな分野で精力的に活躍する魅力的な先生方とお会いする機会に恵まれました。そのような先生方と研究に取り組む機会をいただけたことは、大きな財産です。

現在は、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻で勤務しております。赴任直後は、京都の町並みに調和している京都大学のキャンパスが懐かしく、京都や京都大学の魅力を再認識しました。これからは京都大学で学んだこと、経験したことを糧に、教員として、また研究者として成長できるよう精進していく所存です。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、ご指導いただきました基礎看護学講座の先生方をはじめ、看護科学コース、人間健康科学系専攻の先生方、また、人間健康科学科の事務室の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



新任のご挨拶

看護科学コース 教授 奥野 恭史

平成 29 年 8 月 1 日付で、医学研究科・人間健康科学系専攻・看護科学コース・臨床看護学講座・生活習慣病看護学分野（ビッグデータ医科学）の教授を拜命いたしました。この場をお借りして、自己紹介ならびに当研究室の紹介をさせていただきます。

私は、平成元年に本学薬学部に入學し、本学薬学研究科を経て、平成 12 年に博士（薬学）の学位を頂きました。私の大学院当時はヒトゲノム計画の全盛期であり、伝統的な分子生物学の研究室で育った私にとって、米国を中心に繰り広げられる壮大なゲノム研究への憧れを強く抱いた学生生活を送りました。私が学位を取得したのは、国内のバイオインフォマティクスが立ち上がり出した草創期であり、折しも本学化学研究所に新設されたバイオインフォマティクスセンターのポスドク一期生としてこの世界に飛び込んだことが現在の仕事に従事するきっかけとなっております。その後、本学薬学研究科に助手として戻り、助教授・准教授を経て、平成 20 年より同研究科システム創薬科学講座の寄附講座教授に就任いたしました。つづいて、平成 26 年より、本学医学研究科・臨床システム腫瘍学講座の寄附講座教授に着任し、本学医学部附属病院の実臨床データを対象にしたビッグデータ解析技術の開発に取り組んでおります。

ライフサイエンス分野、医療分野に限らず、社会全体における IT 化の波はとどまるところを知らない状況です。最近では、IT 化にともなって急速に増加するデータの有効利用の可能性に期待が寄せられ、「ビッグデータ科学」という新しい分野が世界的に注目され始めています。バイオメディカル分野においても、近年の計測テクノロジーの著しい進展にともない、ゲノム規模の生体分子情報（オミクス情報）を容易に取得できるビッグデータ時代に突入し、パーソナルゲノムなどのビッグデータ解析手法の研究開発が急務とされています。とりわけ、医療分野においては、日常診療で集積する臨床情報に加えて、パーソナルゲノム情報などの様々な生物学的情報を用いることによって、患者個人にあわせた医療の最適化、すなわち個別化医療の実現が期待されています。このような時代のニーズに応えるべく、生活習慣病看護学分野（ビッグデータ医科学）では、人工知能やスーパーコンピュータを駆使し、医療や創薬を対象にした様々なビッグデータ解析技術の開発を行っております。これにより、患者のゲノム情報や臨床情報に基づき、患者個人の病態変化・治療効果・副作用を予測することで患者個人に最適な治療戦略を合理的に推定するアルゴリズムの開発に取り組んでいます。

医学領域において、ビッグデータ科学を対象にした分野は当研究室が日本初であることと存じます。京都大学の名に恥じぬ世界をリードする「ビッグデータ医科学」の教育・研究拠点になるべく邁進する所存でございますので、今後とも、何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



次世代の緩和ケア従事者を育成

看護科学コース 教授 恒藤 暁

平成 28 年度で京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻看護科学コースの教授を拝命しましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は昭和 60 年に筑波大学医学専門学群を卒業し、淀川キリスト教病院ホスピスで 14 年間勤務しました。その後、大阪大学大学院医学系研究科 緩和医療学寄附講座で診療・教育・研究に 8 年間携わってきました。

高校生の時、数学や物理が好きでしたので、漠然と工学部か理学部に行こうと思っていました。ところがある頃からモノよりは人間について深く知りたいと強く思うようになり、人間を理解するには医学部が良いと考え、筑波大学に入学しました。しかし、医学部での学びは、知識中心、病気中心、身体中心の医学教育で、私が期待していた人間理解からはほど遠いものでした。そのように感じていた大学 4 年生の時に、わが国初のホスピスを聖隷三方原病院に創設した原 義雄先生の「ホスピス」という特別講義を聞いて、初めてホスピスの存在を知りました。

翌年の春休みの 1 週間、聖隷三方原病院のホスピスを見学しました。ホスピスでは、愛に裏打ちされた、思いやりと配慮のあるきめ細やかなケアがなされていることに感動しました。愛と奉仕の精神がスタッフのケアに息づいていたように感じられました。そこからは治らない人にもしっかりと関わる姿勢と情熱が伝わってきました。

大学卒業後、がん患者の痛みを治療するペインクリニックで研鑽を積みました。日本ペインクリニック学会のシンポジウム終了後に恩師となる柏木哲夫先生にお会いし、お話を伺った後に「ホスピスと一緒に働きませんか」と有り難いお誘いをいただきました。その当時は「終末期ケアは医師の仕事ではない」、「治らない患者に医療費を使うのは無駄遣いである」と言われました。当時はホスピスに対する誤解と偏見が強くあり、ホスピス医は奇人・変人扱いもされていました。今となっては隔世の感があります。

今後は緩和ケアの診療・教育・研究に従事しながら、次世代の緩和ケア従事者の育成に励みたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

看護科学コース 教授 古田 真里枝

4 月 1 日付で、人間健康科学系専攻看護科学コース家族看護学講座母性看護・助産学分野の教授に就任いたしましたので、この誌面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は、幼少時代からアフリカに興味があり、アフリカで保健医療活動に携わりたいとの思いから助産師になりました。1999 年に渡英し、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院で国際開発・比較文化を学び、またロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院修士課程でプロダクティブヘルスを学びました。その後、国連人口基金スーダン事務所で働く機会を得、停戦地域における国内避難民や、エチオピア・エリトリア難民を対象としたプロダクティブヘルスプロジェクトの立案を担当致しました。その中で、保健プログラムの効果をエビデンスとして構築できる人材の不足に直面し、この経験が、私が将来研究者になりたいと願うきっかけとなりました。

2008 年、研究手法を学ぶ必要性を痛感し、助産領域において世界を牽引する研究者を輩出しているロンドン大学キングス・カレッジ・ロンドンの博士課程に入学しました。在学中は大学附属病院である聖トーマス病院の多職種から成るウィメンズ・ヘルスリサーチ・グループの一員として、周産期のメンタルヘルスに関する疫学研究を実施しま

した。博士号取得後は、同大学院に疫学専門のリサーチ・フェローとして勤務する傍ら、システマティックレビューの methodologist として 分野を超えた研究に携われるように、オックスフォード大学修士課程 Evidence-based Health Care にて医療統計学等を学びました。

2014 年から、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コースにて、家族看護学講座の准教授として教育に携わる機会を頂きました。京都大学着任後も前任地のキングス・カレッジ・ロンドンに客員研究員として籍を置き、英国学術誌 Midwifery の副編集長を務めさせて頂いたり、高度実践助産学学生の短期研修をロンドン大学で実施したりと積極的に教育・研究における連携を行っています。

今後は、京都大学の「世界レベルの研究を牽引する研究者の養成」というミッションのもと、国際共同研究のさらなる推進に貢献したいと考えております。また、本学医学部附属病院の多職種から成る病院スタッフと連携をとらせて頂きながら、Patient outcomes の向上に繋がる臨床試験や大規模疫学研究にも力を注ぎたいと考えております。京都大学という日本、そして世界をリードする組織の一員として働く機会を頂いたことに感謝し、微力ではありますが教育と研究を通して貢献出来るよう、精一杯精進してまいります。どうぞご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 准教授 池添 冬芽

平成 28 年 10 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻リハビリテーション科学コース理学療法学講座准教授に就任いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成 6 年に京都大学医療技術短期大学部に助手として着任してから 20 年以上にわたって本学での教育に携わってまいりました。幸いなことに、私は本学に入職してからも継続して本学医学部附属病院において臨床経験を積ませて頂いているので、この貴重な臨床経験を基盤として理学療法士の育成に努めてまいりました。近年では理学療法士の養成校の急増に伴い、1 年間に約 1 万人もの理学療法士が輩出されるようになり、理学療法士の質の低下を懸念する指摘や理学療法士の未来に不安を感じる声も聞かれるようになってきました。このような状況の中で、本学においても理学療法士を目指さない、すなわち一般就職を選択する学生が増えている現状であることは否めません。これからも理学療法士はやり甲斐のある魅力的な職業であるという実体験での想いを伝えていきたいと考えております。また、2007 年度より大学院教育が始まってからは大学院生の指導にも携わり、大学院生および修士課程の指導にあたってきました。今後も世界レベルの研究を牽引する研究者の養成を目指し、高度な知識・技術を身につけ最先端の研究を推進できる高度医療専門職を育成したいと考えております。

研究面では主として高齢者の介護予防に関するフィールド研究に携わってきましたが、この分野において、まだ必ずしも科学的根拠に基づいた介入がされているとはいえません。健康寿命の延伸のためには運動機能の維持向上が重要であるという認識はされているものの、どのような運動介入が有効であるかはまだ不明な点が多く、運動機能のスペシャリストである理学療法士が取り組むべき課題は多く残されていると考えます。本学から高齢者研究の発展に寄与する研究成果を発信することによって、理学療法のゴールドスタンダードを確立・普及していきたいと考えております。

微力ではございますが、これまで本学において培った臨床・教育・研究の経験を生かし、本学のさらなる発展のために尽力してまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

看護科学コース 准教授 白井 由紀

2017年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻看護科学コース臨床看護学講座 緩和ケア・老年看護学分野の准教授として着任いたしました白井由紀と申します。本誌をお借りしまして、皆さまにご挨拶を申し上げます。

私は、東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻を卒業後、東京医科歯科大学医学部附属病院にて、血液腫瘍と膠原病を主とする混合内科病棟に勤務しました。患者さんのケアに携わらせて頂くなかで、造血器悪性腫瘍患者さんへの緩和ケアについて学びを深めたいという思いから、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻の博士前期課程に入学しました。大学院では、白血病・悪性リンパ腫患者の終末期ケアについて調査研究を実施しました。同大学院博士後期課程を修了した2007年のがん対策基本法が施行され、わが国の対がん政策は一気に進みだしました。私は国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部（当時）にリサーチレジデントとして入職し、第3次対がん総合戦略研究事業の中で、患者・医療者のコミュニケーション向上を目的としたプログラムづくりの一端を担わせて頂きました。その経験から、研究結果を臨床や患者・家族に還元するためには、結果を利用しやすい形に変え、届けていくことが重要であると学びました。今後も、研究者として、エンドユーザーを念頭におきながら、自身の専門分野であるがん医療におけるコミュニケーションや造血器悪性腫瘍患者に対する緩和ケアに関する研究を進展させていきたいと思っています。リサーチレジデント期間が終了した2009年からは、東京大学大学院がんプロフェッショナル養成課程の特任助教として、がん看護専門看護師の養成に務めました。その後、実家のある京都に戻り、2016年度末まで、京都府城陽市にあるあそかビハラー病院という独立型緩和ケア病棟にて、研究主任として勤務しておりました。

このたび、5年ぶりに大学・大学院教育に携わることとなり、毎日多くの刺激を頂いております。これまで看護の領域では、「臨床家」か「研究・教育者」か、の二極化がみられました。しかしながら、看護は実践の学問であり、臨床と研究が両輪となって看護を進展させていくのが本来あるべき姿と考えます。看護科学コースでは、来年度に高度実践看護師課程の開講が予定されております。大学・大学院教育のなかで、臨床と研究の両輪を動かすエキスパートナースの養成に尽力して参りたいと存じます。

今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 准教授 谷向 仁

2017年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 リハビリテーション科学コース 作業療法学講座 脳機能リハビリテーション学分野に准教授として就任いたしました谷向 仁（たにむかいひとし）と申します。

私は1995年に愛媛大学医学部を卒業後、大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室に入局しました。精神科臨床のトレーニングを受けた後に大学院に進学し、認知症、特にアルツハイマー型認知症（AD）の病態に関する神経化学的研究に従事しました。学位取得後、大阪堺市にある浅香山病院（総合病院ですが、精神科だけで当時900床ほどありました）にて、精神科救急、措置入院、認知症疾患センターでの認知症の鑑別や心理・行動症状の診療、身体疾患に伴う精神症状への対応（リエゾン活動）、精神科リハビリテーションなどを含む幅広い精神科臨床の経験を得て、精神保健指定医を取得しました。その後、ニューヨーク州立小児発達研究所に3年間留学し、ADにおけるタウ蛋白

の異常リン酸化に関する研究の権威である Iqbal 博士夫妻の指導の下、再び AD の病態に関する研究に従事しました。帰国後は関連病院にて認知症外来の整備に携わった後、大阪大学精神医学教室に戻り、附属病院の緩和ケアチームに精神科医として参加し、臨床、教育、研究に従事しました。その後、大阪大学保健センターにてメンタルヘルスに関する診療、教育、研究に従事し、2015 年 8 月に、京都大学大学院医学研究科臨床腫瘍薬理学・緩和医療学講座 特定准教授として赴任し、附属病院にてがんサポートチームでの活動を行ってまいりました。

緩和ケアチームでの活動も 10 年を超えましたが、様々なステージのがん患者さんとの対話や多職種の医療スタッフとの連携、チーム活動は、これまでの自分の診療の幅をさらに広げ、自らの価値観にも大きな影響を与える経験となっています。この度、リハビリテーション科学コースに所属させていただきましたが、臨床におけるリハビリテーションの役割は、患者さんの生活を支え、QOL の維持・向上を目指す点において緩和ケア・サイコオンコロジーと大きく共通する領域だと感じています。

今後は、これまでの活動にがんリハビリテーションの視点を加え、京大病院とも連携をとり、多職種・多分野の方々と協力しながら、教育、研究、臨床を行っていきたくと考えております。研究面では、がん医療における心理的問題（不安、抑うつ）は勿論ですが、認知機能障害、睡眠障害の領域にも取り組んでいきたいと考えています。

不慣れなことも多いと思いますが、今後とも、ご指導・ご鞭撻の程、宜しく願いいたします。



着任のご挨拶

看護科学コース 助教 清水 彬礼

2017 年 3 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 臨床看護学講座助教に着任いたしました清水彬礼と申します。本誌をお借りして、着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、京都大学医学部保健学科看護学専攻の一期生として卒業後、京都大学医学部附属病院の内科病棟（内分泌・代謝内科、血液腫瘍内科、老年内科、腎臓内科）で 3 年間臨床経験を積みました。その後、大学院医学研究科人間健康科学系専攻に戻り、修士課程・博士後期課程では、本田育美准教授（現 名古屋大学大学院医学研究科看護学専攻教授）、細田公則教授（現 国立循環器病研究センター 動脈硬化・糖尿病内科部長）のご指導のもと、生活習慣病患者の自己管理行動に興味を持ち、ヒトを対象とした調査研究および行動学的手法を用いた基礎研究を行いました。昨年 1 年間は、京都大学メディカルイノベーションセンターの연구원として研究活動に従事してまいりました。

研究所とは全く異なる環境に慣れないことも多い中、実習指導などの教育活動でも周囲の先生方に支えていただき大変感謝しております。教育者としても研究者としてもまだまだ未熟ではございますが、尽力して参る所存でございます。今後とも、何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

着任挨拶

看護科学コース 助教 片山 泰佑

平成 29 年 4 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座生活習慣病看護学分野の助教に着任いたしました片山泰佑と申します。本誌をお借りして、皆様にご挨拶申し上げます。

私は、平成 15 年に岡山大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、大阪市内の総合病院で 6 年間勤務し、大阪府立大学大学院看護学研究科に進学し慢性看護学を専攻しました。平成 23 年度より京都大学医学部附属病院の免疫・膠原病内科病棟の看護師として 4 年間勤務した後、平成 27 年度より看護部の調査・研究担当の専任看護師として、ナー

スコール、患者満足度、看護必要度、看護職員の職務満足度や超過勤務等の看護の質の評価や看護管理に関わるデータの管理および分析を業務として活動して参りました。臨床現場では、この他にも看護に関連するデータが多く蓄積されていますが、病院に勤務する看護職員によるデータの利用や分析は活発とは言えない状況であります。

このたび平成 29 年度より始めました京都大学医学部附属病院看護部とのダブルアポイントメントで着任いたしましたことを機に、臨床現場における実践上の疑問を出発点として、既存データを効果的に利用した分析により得られる実用的な知見を臨床現場に多く還元し、看護の質の向上に努めていくことを責務として研究活動および臨床における看護実践活動のいずれにも尽力して参りたいと考えております。

最後になりましたが、今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

看護科学コース 助教 井沢 知子

平成 29 年 4 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の助教に着任しました井沢知子です。本誌をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成 16 年に兵庫県立看護大学大学院看護学研究科修士課程がん看護学講座において、専門看護師養成コースを修了し、翌年の平成 17 年に日本看護協会認定のがん看護専門看護師のタイトルを取得しました。私はがん看護学領域において、長期生存するがんサバイバーの方々の QOL に着目しています。具体的には、がん治療後に上肢、下肢に生じるリンパ浮腫のケア開発についてこれまで研究を行い臨床現場でもケアを提供してきました。平成 20 年よりがん看護専門看護師として京都大学医学部附属病院に就職し、がん患者さんやご家族のケア、がん看護に関する院内教育、がん医療に関わる多職種の方々と共にチーム医療を実践してきました。現在は京大病院とのダブルアポイントメント助教として、平成 30 年開講予定の高度実践看護師養成コースの準備に追われています。近いようで遠かった大学と病院を毎日行き来することになり、どちらの立場からも状況が見えるようになってきました。臨床現場だけでは経験できない機会を与えていただいたことに感謝し、今後の両施設の発展に少しでも貢献できるように邁進したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

検査技術科学コース（科学技術人材育成コンソーシアム構築）

特定准教授 福間 真悟

平成 29 年 4 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻特定准教授に着任しました福間真悟と申します。本紙をお借りして、ご挨拶申し上げます。

私は、内科医師として 8 年間勤務後、2010 年から社会健康医学系専攻で疫学を学び、2013 年より医学部附属病院の教員として、臨床研究の教育、実践などを行ってまいりました。

この度は、京阪神次世代グローバルリーダー育成コンソーシアム（K-CONNEX）の特定准教授として、勤務する機会を頂きました。K-CONNEX は、若手研究者の独立した研究環境を支援する京都大学、大阪大学、神戸大学の連携プログラムです。私も 4 月の着任以降、コンソーシアムに所属する多分野の研究者の刺激を大いに受けながら、精進しております。

私の研究分野は、「臨床研究デザイン」と呼んでおります。現在、医療や保健のデータが蓄積され、研究や現場の課題解決に活かせる時代になってきています。IT 環境の急激な進化によって、扱えるデータ量は各段に増え、いわゆ

る big data の時代です。しかし、データ量が多いだけでは、医療や保健の現場に有用な結果を得ることは出来ず、「どのような方法（デザイン）でデータを分析、解釈するか」ということが重要で、これが、まさに「臨床研究デザイン」と呼びます。私は、医療や保健の big data を活用して、正しく分析し、医療や保健の質を向上するための研究を行っております。

具体的には、日本国中のレセプトデータベース（NDB）を分析して高齢者のエビデンス・診療ギャップを可視化する研究や、大型国保組合データを分析して、健診異常者の受療行動を分析する研究などを行っています。

若輩者ですので、ご指導のほど、よろしくお願いします。



就任挨拶

看護科学コース（AMED） 特定助教 小島 諒介

2017年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座（ビッグデータ医科学）の特定助教に着任しました小島諒介と申します。本誌をお借りして、皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、もともと人工知能に興味があり、2012年東京工業大学情報工学科を卒業後、さらに統計的機械学習や人工知能に関する研究を深めたいという思いから、進学し、修士課程時代は同大学計算工学専攻にて佐藤泰介教授の指導の下、「プラン認識」と呼ばれる時系列データ解析手法に関する研究に取り組んでおりました。また、博士課程時代は同大学情報環境学専攻にて中臺一博教授の下、「音環境認識」や「ロボット聴覚」と呼ばれる、音に着目した時系列データ解析に関する研究を行ってきました。

さらに、京都大学の奥野恭史教授に医療におけるデータ分析の魅力についてご教授いただき、それに感銘を受け、今まで行ってきたデータ解析研究を医療分野の研究へと応用していきたいと考えようになりました。京都大学では奥野研究室の皆様と協力しつつ、より一層、教育・研究活動に尽力していく所存です。最後になりましたが、皆様のご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

共同研究講座（味覚分子構造科学講座） 特定准教授 荒木 望嗣

平成28年10月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 味覚分子構造科学講座 特定准教授に着任しました荒木望嗣と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、平成19年に、神戸大学大学院自然科学研究科 分子物質科学専攻を修了後、同大学大学院医学研究科の学術推進研究員としてがん原遺伝子の産物であるRASを分子標的とした抗癌剤の開発研究に携わってきました。そのプロジェクトの中で、私は、核磁気共鳴法（NMR）を使用して、Rasタンパク質の立体構造及び薬剤候補化合物との相互作用を解析しました。その際、実験的検証には費用と時間の両面において多大なコストがかかることを痛感しました。そこで、計算科学的手法によって医薬品開発における実験コストを軽減できないかと考え、平成26年からは、理化学研究所計算科学研究機構において、分子シミュレーションを使用した創薬研究に携わってきました。そこでは、「京」などのスーパーコンピューターを使用し、種々の創薬ターゲットタンパク質の機能活性に重要な立体構造的特徴の抽出、およびタンパク質を機能阻害する医薬品化合物を予測する技術開発を行ってきました。今後は、これまでに開発してきた創薬シミュレーション技術を活用し、生活習慣病と密接にかかわる味覚感知の分子メカニズムを明らかにするとともに、味覚受容体を活性化・不活性化する低分子リガンドの効率的な探索に貢献して参りたいと考えて

おります。

最後になりましたが、今後も研究と教育に尽力していきたいと考えております。精一杯努力いたしますので、今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

共同研究講座（味覚分子構造科学講座） 特定助教 岩田 浩明

2016年10月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 味覚分子構造科学講座 特定助教に着任しました岩田浩明と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、2011年に、京都大学大学院情報学研究科 知能情報学専攻を修了いたしました。その後、大学の研究員として、京都大学では、大量のゲノム配列データを用いた生物学的な解析を行い、九州大学に移ってからは、創薬の基礎研究に重点を移し、機械学習法による薬の新規効能予測や薬理作用予測の手法開発を行って参りました。また、最近では分子動力学シミュレーションによって産出されるデータを解析するなど、これまで一貫して、ビッグデータから知見を得ることを目的とした研究を行っております。現職では、これまで培ってきたバイオインフォマティクス解析技術やビッグデータ解析技術、計算機シミュレーション技術などを活かし、多方面から味覚のメカニズムに関する研究を行っていきたいと考えております。

昨今のAIブームにより、より一層ビッグデータ解析分野の人材育成が求められていると感じております。これまでの研究経験を次世代に伝えることで、人材の教育にも力を入れていきたいと考えております。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成 29 年度救命講習会の開催について

平成 27 年度から始まった全新生への救命講習会も、今年で 3 年目に突入しました。平成 29 年 4 月 4 日（火）から 4 月 6 日（木）、学部の新生に対して行われた全学機構ガイダンスで、新生 2,930 人全員を対象とした救命講習会を実施しました。

この講習会では、新生全員が、心肺蘇生のトレーニングキット「あっぱくん®」を使って、心肺蘇生と AED（自動体外式除細動器）の使い方を体験しながら救命救急の意義と具体的な方法を学びました。医学研究科人間健康科学系専攻の教員を中心に、医学部附属病院救急部、国際高等教育院などのべ 180 人以上の教員がサポートスタッフとして参加しています。参加している私たち教員は、京都大学に入学してきた学生が、困っている人を見かけたら、自ら進んで助けられる心優しい人間になり京都大学を巣立っていくことを、心から願って毎年オリエンテーションでこの「いのち」の教育を行っています。

なお、本専攻では、授業時間を中心に、種々の機会に継続的に救命講習を実施していく予定をしています。

今回の講習会は、京大広報にも掲載されています。講習会を受講した学生の「声」が報告書には含まれておりますので、是非ご覧ください。



第 29 回健康科学市民公開講座開催報告

平成 28 年度学術委員長 鈴木 真知子

平成 28 年 11 月 5 日（土）に「みんなの笑顔と社会・医療の課題」をテーマに第 29 回健康科学市民公開講座を、杉浦ホールで開催致しました。今回は、周産期メンタルヘルスなどでご活躍中の広尾レディース院長、宗田聡先生を東京からお迎えし、お母さんやお父さんになる人たち、あかちゃんなどの子どもをめぐる現状から、特に社会的に大きな課題になっている障がい児のことや、不妊症、産後うつと虐待について、それぞれの講師からお話しいただき、今後の社会・医療のあり方を探る機会として企画致しました。特に、公開講座のチラシは、テーマに関心をもっていたために、24 時間の人工呼吸管理を自宅で行っている脊髄性筋萎縮症のお子様に視線でパソコンを操作し、可愛らしい色合いのイラストや子どもの気持ちを書きいただきました。

当日は快晴に恵まれ、建物の中にいるのが「もったいない」天候でした。小児に関連したテーマは、参加者が少ないという前評判から参加状況を心配していましたが、70 名の市民の方々、公開講座担当教員と職員 10 名に加え、学内から学生や教員の参加もあり、会場はほぼ満席となるご来場がありました。

専攻長の開会挨拶では、本専攻の改組への取り組みの紹介と共に、少子化問題をはじめとする周産期に関する話題がいかに重要であるかが述べられました。続いて、本公開講座の企画・運営責任者より、少子化のその一方では、医療的なケアを必要とする重度の障がいを持つ子どもの数が増加しており、最近では、新たな課題として、重症心身障害児ではなく、高度医療依存児という「歩いて話せる超重症児」の増加が認められており、小児在宅医療のさらなる進展が求められているという説明がありました。

次に、少子化にも関連する話題として、講演 1. では、本専攻家族看護学講座教授による「不妊症をめぐる課題」について、不妊治療の新たな展開である未受精卵凍結保存や卵子バンク、子宮移植の現状などが分かりやすく解説されました。子どもが得られないご夫婦には、大きな希望につながる研究の方向性と医療技術の進歩を知ることができました。

講演 2. では、宗田先生より、母児関係と産後のメンタルヘルス、子ども虐待のリスク要因と予防、産後うつの定義、早期発見、予防対策などを、分かりやすくまた、身近な問題として解説していただきました。それらより、妊娠期から始める早期育児支援と共に、妊娠前から妊娠と精神疾患について啓蒙していくことの重要性、他業種や地域との平日頃からの連携、産後の継続的な支援と、望む人が産みやすく育てやすい社会環境を整えることの大切さに人々が関心を向けるように社会を変えていくこと、地域の人々が支え合うコミュニティ作りの大切さを再認識できました。

ご来場者からは、1. 将来、男性のみで子孫を残せる可能性があるのか、2. 自然妊娠と人工授精で妊娠した子どもの将来に健康面での違いはないのか、など不妊治療の進歩への期待と不安に基づく質問と意見交換がなされ、瞬く間に時間が過ぎ、閉会となりました。

アンケートでは、56 名から回答をいただき、良かったと回答した方が、50 名と大半を占めていました。その理由は、「知らなかった最近の知見を得ることができた」「私が将来子供を産むときの勉強になった」「関心のあるテーマ」「とてもわかりやすい解説で、知らなかったことを知ることができた」「これからの私にとって、とても大切なこと」などが多く、本テーマを取り上げた意義が確認できました。このことは、今後要望するテーマ；不妊治療の日本と他国の現状、再生医療、高齢出産、視覚や聴覚に障害のある方の住みやすい街づくり、などからも窺えました。このような状況を受け、今後の企画として、小児在宅医療や周産期医療に関連したテーマも積極的に組み入れて検討するよう、次期公開講座を担当する委員に引き継いでいきたいと思います。



2016 年度オープンキャンパス

2016 年度オープンキャンパスは 2016 年 8 月 9 日（火）に前年度と同様、A 時間帯、B 時間帯の 2 回にわたって行われました（表 1）。全体説明会では、足立学科長の挨拶のあと、各コース（看護、理学、作業、総合）の紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室等の施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表 2 に示しますが、A 時間帯は女子 174 名、男子 38 名の計 212 名、B 時間帯は女子 161 名、男子 50 名の計 211 名が参加しました。専攻別では看護 132 名、理学 58 名、作業 14 名、総合 174 名でした。また、都道府県別では京都 54 名、大阪 58 名を始めとして東北や九州からも参加者がいました。2017 年度は 8 月 9 日（水）に行われる予定で、今後の京都大学医学部人間健康科学科に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。

表 1 オープンキャンパス 2016 スケジュール

A 時間帯（10：00～12：00）		B 時間帯（13：00～15：00）	
9:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室	12:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室
10:00	開会 学科長あいさつ	13:00	開会 学科長あいさつ
10:05	各コースの紹介 平成 29 年度以降の入学について	13:05	各コースの紹介 平成 29 年度以降の入学について
10:30	相談コーナー ・入試・組織再編について、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース (理学療法学講座、作業療法学講座) ・総合医療科学コース	13:30	相談コーナー ・入試・組織再編について、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース (理学療法学講座、作業療法学講座) ・総合医療科学コース
12:00	終了	15:00	終了

表 2 オープンキャンパス 2016 参加者状況

●参加者数

	参加者数		高 1		高 2		高 3		既卒生		その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	174	38	65	12	60	16	29	6	9	1	11	3
B 時間帯	161	50	54	17	64	21	31	6	7	2	5	4
計	335	88	119	29	124	37	60	12	16	3	16	7
	423		148		161		72		19		23	

・当日参加者（内数）：A 時間帯 12 名 / B 時間帯 19 名

●コース別人数

	看護		理学		作業		総合		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	70	1	16	11	9	2	57	19	22	5
計	71		27		11		76		27	
	看護		理学		作業		総合		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
B 時間帯	59	2	15	16	1	2	70	28	16	2
計	61		31		3		98		18	

●参加者の都道府県別人数【※A・B時間帯合わせた人数】

北海道	1	青森	2	秋田	0	岩手	0	宮城	0	山形	0
福島	2	茨城	4	千葉	3	栃木	0	群馬	3	埼玉	6
東京	12	神奈川	5	山梨	0	新潟	1	長野	5	静岡	12
愛知	18	岐阜	10	三重	17	富山	7	石川	7	福井	13
滋賀	20	京都	54	大阪	58	兵庫	32	奈良	18	和歌山	17
徳島	7	香川	10	愛媛	12	高知	3	岡山	4	広島	24
鳥取	2	島根	0	山口	1	福岡	5	大分	2	佐賀	2
長崎	5	熊本	9	宮崎	7	鹿児島	1	沖縄	1	不明	1

●相談コーナー参加者数

- ・入試・組織再編についての相談コーナー 11 名
- ・学生受験相談コーナー 15 名

人間健康科学系専攻から博士が 10 名誕生しました

博士授与者と論文題目

張 俊 根

論文題目：Study on the Application of Shear-wave Elastography to Thin-layered Media and Tubular Structure: Finite-element Analysis and Experiment Verification
(Shear-wave Elastography 法の薄板状と円筒状の媒質への適用に関する研究：有限要素解析と実験的検証)

金 山 三恵子

論文題目：Longitudinal burnout-collaboration patterns in Japanese medical care workers at special needs schools: a latent class growth analysis
(日本の特別支援学校の医療的ケア従事者におけるバーンアウトと協働の推移パターンの解明—縦断データを用いた潜在クラス成長分析—)

天 野 玉 記

論文題目：The role of alternating bilateral stimulation in establishing positive cognition in EMDR therapy: a multi-channel near-infrared spectroscopy study
(EMDR 療法での肯定的認知の構築における左右交互刺激の役割：多チャンネル近赤外線分光法を用いた研究)

飯 島 弘 貴

論文題目：Exercise intervention increases expression of bone morphogenetic proteins and prevents the progression of cartilage-subchondral bone lesions in a post-traumatic rat knee model
(ラット外傷性変形性膝関節症モデルに対する運動介入は骨形成蛋白の発現を増大させ関節軟骨 - 軟骨下骨病変の進行を予防する)

岡 田 光 貴

論文題目：CD68 on rat macrophages binds tightly to S100A8 and S100A9 and helps to regulate the cells' immune functions
(S100A8 及び S100A9 はマクロファージ上の CD68 と結合し、細胞の免疫機能を制御する)

久 保 緋紗子

論文題目：Absence of kynurenine 3-monooxygenase reduces mortality of acute viral myocarditis in mice
(キヌレニン 3 - モノオキシゲナーゼの欠損は急性ウイルス性心筋炎マウスの死亡率を軽減する)

古 畑 彩 子

論文題目：Immunohistochemical Antibody Panel for the Differential Diagnosis of Pancreatic Ductal Carcinoma from Gastrointestinal Contamination and Benign Pancreatic Duct Epithelium in Endoscopic Ultrasound-Guided Fine Needle Aspiration
(EUS-FNA 検体における膵管癌と胃腺窩上皮・良性膵上皮との鑑別に有用な免疫染色抗体パネル)

渡 邊 寛

論文題目：Psychosine-triggered endomitosis is modulated by membrane sphingolipids through regulation of phosphoinositide 4,5-bisphosphate production at the cleavage furrow
(サイコシンによるエンドマイトーシスは、分裂溝におけるホスファチジルイノシトール 4,5-ビスリン酸の生合成を制御する膜のスフィンゴ脂質類によって調節される)

塚 越 累

論文題目：Effect of weight-bearing exercise on motor function in female after

total hip arthroplasty

(人工股関節置換術後女性の運動機能に対する荷重位エクササイズの効果)

河野 哲也

論文題目：Ghrelin O-acyltransferase knockout mice show resistance to obesity when fed high-sucrose diet.

(グレリン O-アシル基転移酵素ノックアウトマウスは高スクロース飼料給餌条件下において抗肥満性を示す)



Never quit

金山 三恵子

平成 28 年度に博士号（人間健康科学）を取得することができました。この度は、このような機会を与えて戴いたことに心より感謝致します。

私は現在、愛知県の中部大学で“子どもの保健”を教えています。

京都大学大学院（博士後期課程）の3年間は、人生で最も辛く苦しく不安な時間でした。論文を投稿すると厳しい査読コメントとともに“Reject”と添えられている経験を何度か繰り返すと、自分の研究なんて駄目なんだ…と自分で自分の研究を全否定する気持ちになりました。このまま博士号がとれなかったら、自分の将来はどうなるのだろう…という漠然とした不安に襲われて、眠れなくなったりもしました。勉強しても勉強しても知識にゴールが見えないことも不安でした。京都大学ではない大学だったら、もっと楽に博士号を取得できるのでは…と考えたこともありました。

そんな苦しい時間の中で私の考え方に大きな変化が2つ起こりました。この変化は、大学院での苦しい時間を人生の中で最も充実した素晴らしい時間に変えてくれました。1つ目の変化は、先生方、先輩方や同期の仲間…そういった周囲の方々の研究への情熱や努力を感じることで、研究を respect する気持ちが自然に湧き出てきたことです。2つ目の変化は、自分の研究には自分にしか発見できないことがきっとあるはずだから、自分の研究を大切に育てて行こうと思えるようになったことです。この2つの心の変化は私の人生の大きな財産だと思います。

私は研究者としてのスタートが遅いので、この先の研究者としての人生にも不安が一杯です。それでも私は研究を続けたいと思います。それは、探求した先に何が見えるかを知りたいからです。Never quit!! 私の魔法の言葉です。

最後になりましたが、成育看護学分野教授の鈴木真知子先生、講座の皆さん、ご指導・ご支援を有難うございました。心より感謝申し上げます。これからも鈴木研究室の一員であることを誇りにして、前を向いて上を向いて頑張ります。



博士号取得までの5年間で振り返って

飯島 弘貴

私は大学卒業後、3年間の理学療法士の実務経験を経て、運動器疾患の病態やリハビリテーション効果のメカニズムを明らかにしたいと思い、2012年に京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻に進学しました。そして、指導教員や先輩方より研究に対する姿勢から具体的な解析手法、国際誌執筆についてなど、手厚い御指導を頂いた結果、

2017年3月に博士号(人間健康科学)を取得することができました。

修士課程への進学後、前述の研究課題を推進するため、基礎研究を行う研究室で動物実験を進めていましたが、既存の手法では解決できないことが明確になりました。そこで、翌年の2013年からは、動物実験と並行してヒトを対象とした疫学研究を開始しました。一見独立して見える基礎研究と疫学研究が補完的な関係にあることがこの経験を通じてよく分かり、結果として双方における学術成果を飛躍的に伸ばすことができました。このように気ままに研究をさせて頂けたのは、ひとえに「自由の学風」を謳う京都大学であればこそであり、充実した環境設備や、複数の分野にわたる先生方からのあたたかい御指導を頂いたお蔭でした。今後の私の使命は、これまでの研究を独自性をもってさらに発展させることだと感じております。

京都大学で研究の楽しさを知った私は、2017年4月から日本学術振興会特別研究員PDとして慶應義塾大学理工学部へ異動し、新たな分野に挑戦しています。日々生じる疑問を解決するには、既存の手法に制約された研究のみでは不十分であり、自ら主体的に新しい学術領域を開拓するような、挑戦的かつ独創的な取り組みをしていきたいと思っています。これまで御指導を賜りました京都大学大学院医学研究科の黒木裕士教授や青山朋樹准教授をはじめとする先生方、研究室の皆様には心より御礼申し上げます。

博士後期課程を振り返って

渡邊 寛

平成29年3月に博士後期課程を修了致しました、渡邊寛と申します。この度は、寄稿という貴重な機会をいただきましたことに、感謝申し上げます。

私は、京都大学薬学部を卒業後、同大学大学院生命科学研究科の修士課程を経て本専攻の博士後期課程に進学致しました。度々所属が変わりましたが、脂質による多倍体化誘導の作用機序の解明を目指し、6年間研究に取り組みました。分裂という生命現象の基礎の一端について深く学べたことは、とても良い経験になりました。

研究室生活で最も良かった点は、様々な経験ができたことです。研究の面では、実験技術の取得や研究の方向性の検討はもちろん、国内外での学会発表や共同研究先の先生との議論など、博士後期課程に進学したことで多くの経験ができました。研究以外でも、学生実習の統率や後輩の指導、研究室の運営のための雑務など、上の立場になり初めて知ることも数多くありました。それらに追われ思うように研究が進まず悩む時期も少なからずありましたが、このような経験も貴重な財産だと感じております。

研究室から離れた今、最も強く思うことは、もっと多くのことに挑戦するべきだったということです。当時は学位取得のために自分の研究を進めることを優先していましたが、他の分野の勉強に時間を費やしても良かったのではないかと自問しております。3年間という時間の制限があるため難しかったかもしれませんが、臨床に近い本専攻に移ったことを有効に活用できれば良かったと思います。博士後期課程は特定の分野の専門家になるための期間だけでなく、そこで身に付けた思考を専門外の分野に応用できることも重要な要素であると感じています。今後は専門性を深めるだけでなく、視野を広く研究活動を続けたいと思います。

最後になりましたが、6年間にわたりご指導賜りました竹松弘准教授、岡昌吾教授、ならびにご協力いただいた研究室の皆様へ深く御礼申し上げます。

博士号を取得して

久保 緋紗子

私は、本学大学院修士課程を修了後、一般企業で約3年間勤務しました。日々の業務に追われる中で、修士課程で感じた『研究(問題点を探し、仮説を立て、それを実験で証明すること)の楽しさ』をもう一度経験したい、『一般

企業での研究開発経験を生かしながら、医学研究の面から社会貢献できるようになりたい』と考えるようになっていました。修士課程の指導教官であった齋藤邦明先生に相談したところ、優しく後押しくださり、本学博士課程への進学を決意しました。博士課程の3年間は、思うように研究が進まず、自分の実力不足を痛感する日々でした。しかし、多くの先生方からご指導いただき、日夜研鑽を積み、研究成果を論文にまとめて博士号を取得出来たことは、私にとって大きな自信に繋がりました。

4月から、名古屋大学の精神医学分野で研究に従事しています。これまでの研究分野とは違うところでのスタートとなり、新鮮な気持ちで毎日を送っています。社会貢献に至るには、まだまだ力不足ですが、引き続き目の前に与えられたことに全力で取り組んでいこうと思っています。

最後になりましたが、卒業研究から修士・博士課程でご指導頂きました齋藤先生、これまでお世話になったたくさんの方々はこの場を借りて御礼申し上げたいと思います。

博士号を取得して思うこと

天野 玉記



2017年3月に博士（人間健康科学）の学位を取得させて頂きました。私の研究は、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の治療にエビデンスがある心理療法 EMDR（Eye Movement Desensitization and Reprocessing）の作用機序の研究で、2004年に兵庫教育大学大学院臨床心理コース修士課程で EMDR のライセンスを取得した頃から始まりました。そして、同大学院修了後、阪神淡路大震災後の心のケアのために設立された兵庫県立淡路景観園芸学校および兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科の専任講師（兼務）に就任してからもこの研究を続けておりました。そこでさらなる研究を進めたいと考え、同校および同大学学長の推薦と許可を頂き、在職しながら

2011年から京都大学医学研究科人間健康科学系専攻リハビリテーション科学コースの博士課程に入学致しました。そして、十一元三教授のご指導を仰ぎ、近赤外分光法（NIRS）を用いた主論文；『The role of alternating bilateral stimulation in establishing positive cognition in EMDR therapy: a multi-channel near-infrared spectroscopy study』と、副論文；『Possible neural mechanisms of psychotherapy for trauma-related symptoms: cerebral responses to the neuropsychological treatment of post-traumatic stress disorder model individuals』をまとめさせて頂きました。EMDR療法は、資源の開発や肯定的認知を構築させる RDI（resource development and installation）と、トラウマ記憶の影響を軽減させる脱感作（desensitization）の2つのステージで構成されていますが、この2つの論文は各々両者のステージにおける脳神経学的な作用機序を研究したもので、EMDR療法の治療メカニズムの基礎となる知見と思われれます。

私は研究を始めて約13年、博士の学位取得までの道のりは長く、遅々として進まぬ研究に焦りを感じたこともありましたが、諦めず努力を続けて参りました。これも偏に十一元三教授をはじめ研究室の皆様のお陰と感謝いたしております。これらの研究成果は国際的にも注目され、EMDRの作用機序解明のための基礎的研究の一つと位置付けて頂けるようになりました。今後も、この研究を続けさせて頂き、一人でも多くの方々が安心して EMDR 治療を受けることができるように貢献したいと思っております。

今後ともご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

博士号を取得して

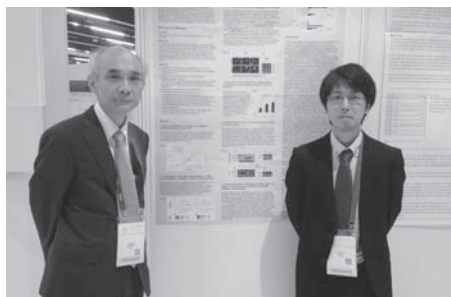
古畑 彩子

平成 29 年 3 月に博士号を取得しました古畑彩子と申します。私は平成 21 年 3 月に名古屋大学医学部保健学科修士課程を卒業した後、京都大学医学部附属病院で検査技師として従事しておりました。配属されている病理診断科の業務を行う中で、膵臓の細胞診に興味を持ち、膵癌の診断に役立つ研究を行いたいと思い、社会人大学院生として本学大学院博士課程に入学致しました。博士課程では、超音波内視鏡下で採取された膵臓の検体において、膵管癌と良性上皮との鑑別に有用な免疫染色抗体パネルの作製を目標とし、研究を行いました。在学中は、日々の業務の中で研究を行うことの難しさに悩んだこともありましたが、お世話になった先生方の支えがあり、無事論文をまとめることができました。大学病院の検査技師には、仕事の中で研究課題を見つけ、まとめ、発信していくことが必要であると考えます。その中で、博士課程で経験したことを活かし、臨床にも研究にも貢献することができる検査技師になれるように邁進していきたいと思えます。

最後になりましたが、ご指導賜りました、足立壯一教授、上久保靖彦准教授、研究室のみなさまに、心より厚く御礼申し上げます。

博士号の取得と今後の展望について

岡田 光貴



平成 29 年 3 月に博士号（人間健康科学）を取得致しました岡田光貴と申します。3 年間の博士後期課程を振り返ってみますと、研究に関して思うようにいかず苦悩することもありましたが、それ以上に楽しく貴重な経験を多くさせて頂きました。私は博士後期課程の 3 年間で 2 本の英語論文を投稿することが出来ました。これらはいずれも厳しい査定が行われ、それに対応するため大変な修正と再実験が必要とされたため、アクセプトされた際の喜びもひとしおでありました。また、フランス（パリ）で行われた国際学会にて発表を行ったことも私にとって大きな思い出

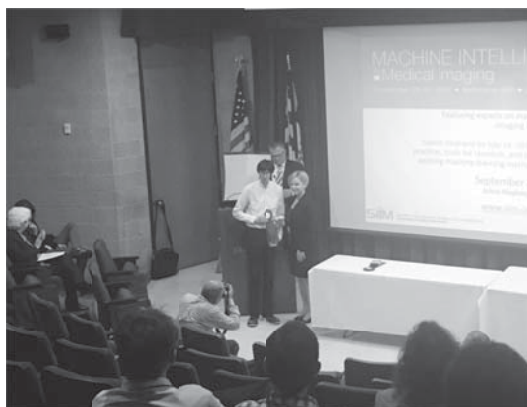
出となっております（写真は発表ポスターの前で、当時の指導教員である池本正生先生と）。国際学会では慣れない英語を話すことに悪戦苦闘しましたが、上手く意図が伝わった際には非常に嬉しく感じられました。

これらの経験を経て無事に博士号の取得が決定した訳ではありますが、私自身はこれで一段落とは思っておりません。博士課程において取り組んできた研究内容にもまだまだ追及の余地がありますし、新たな研究の構想もいくつか思い付いております。また現在、私は病院にて臨床検査技師として勤務しておりますが、こちらでも臨床研究が出来るように取り組んでいる最中であります。以上のように、博士号を取得したことに満足せず、今後も日本の医療と研究の発展に寄与出来るように、努力を重ねていく姿勢が重要であると感じております。まだまだ若輩者では御座いますが、京都大学における博士号の取得者として、また一研究者として今後も日々研究に精進し、より有益な結果を挙げたいと考えております。

また、最後になりましたが、当時の所属研究室の長であります足立壯一教授、ならびにその所属メンバーの方々にはこの場をかりて深く感謝申し上げます。博士後期課程を足立研究室で過ごすことが出来たのは一生の思い出であるとともに、私を大きく成長させて頂きました。さらに、研究の指導を担って頂いた元天理医療大学教授の池本正生先生にも多大な感謝を伝えたいと思えます。それでは、今後の京都大学人間健康科学系専攻の益々の繁栄を心より願うとともに、私自身もその名に恥じる事の無いように日々努めたいと思えます。

ボルティモア留学記

(ジョーンズホプキンス大学博士課程在籍中) 張 海崇



『虎穴に入らずんば虎子を得ず』

日本でもそれほど耳なじみのないこの故事が、近所の日本食レストランのカウンター近くの壁に掲げられている。

私は、学部・修士併せて6年半、検査技術科学専攻に在籍した後、アメリカはボルティモアにあるジョーンズホプキンス大学(The Johns Hopkins University, Maryland) コンピュータサイエンス学部博士課程に進学した。振り返ると、京都大学の自由の学風のおかげで、入学後早期から研究を経験する機会に恵まれ、そのおかげでいつか研究者を将来のキャリアとして見据えるようになった。人体というブラックボックスに対して、見えないものを見える

ようにするという医用画像の魅力に惹かれ、学部4年生から椎名教授の指導のもと、光と超音波を融合した新しい画像診断装置の開発に取り組んだ。周りの環境に恵まれ、結果も出てきた頃、国際会議等で海外の研究者と触れ合う中で、国境のない研究の世界でどこまで通用するのか、自分の限界に挑戦してみたいと思い始めた。その思いは次第に強くなり、私を行動へと駆り立てた。私にとって、アメリカ留学はそれを確かめる一番の近道だったのだ。

ジョーンズホプキンス大学は世界初の研究大学院大学として設立され、特に医学分野は有名であり、全米最高峰の病院と医工学部を誇っている。私が所属する Laboratory for Computational Sensing + Robotics (LCSR) は計算機科学、電気電子、機械工学、医用工学など多分野融合を理念とする組織であり、背景の異なる研究者がチームとなって工学技術の医学応用研究が進められている。この組織の特徴は、研究室同士が非常に開放的であること。各研究室の研究スペースはワンフロアの中でガラス張りになっており、複数の研究室からの学生がオフィスを共有しているため、自然と研究に関するディスカッションは起こり、そこから学生主導の共同研究や新プロジェクトも数多く生まれている。ここでの私のテーマは、超音波診断装置とロボットを融合し、ロボットスーツのように超音波診断をより安全かつ扱いやすく、そして高画質で広視野なイメージング法の確立である。肥満大国であるアメリカにおいて、術者は診断の際に強い力で同じ位置に長時間プローブを押し付ける必要があり、この多大な労力と負担は職業病として問題になっている。ロボット支援による診断の場合、術者は従来通り操作ができる上で、加える力を大幅に軽減することができ、さらにはより鮮明な超音波画像を得ることもできるのだ。これまでになかった研究分野の確立にあたり、ロボット研究の専門家や、他大学の超音波研究室と共同で研究を行い、意見交換を納得するまでし合う。この環境のスケールとスピードに私は日々刺激をもらい、わくわくさせられている。研究をするという点では、とても恵まれた環境だ。

しかし、留学にとって切っても切れないのがカルチャーショック。私は、渡米直前に入籍し、夫婦二人での留学生活が始まった。初めてのアメリカ暮らしは、車社会への適応や食生活の確立など、日本では決して経験しなかったであろう、不便やショックの連続であった。路上にとめていた車の窓ガラスが割られたり、通称 Bedbug と呼ばれるツツガ虫に体中を刺されたり。そんな中でも、妻とともにアメリカの生活に慣れ、楽しみを見出すことができるようになったのは、ひとえに周りの方々のおかげである。免許の取り方からお勧めのスーパーまで、日本にいた頃からすると数え切れないくらい、助け合いという言葉が噛み締める毎日だった。日本では何もかもが便利で、人との繋がりに感謝や有難みを感じる機会は少ないが、アメリカではどう人と繋がっているかで、生活が大きく変わる。そういう意味で、妻や家族、友人の有難みをより感じられるのも留学の醍醐味といえるかもしれない。

留学と聞くと、それだけで特別だと感じる人は多い。ただ、今の自分の周りを見渡せば、博士課程の学生の過半数が海外からの留学生。アメリカにとって、留学は特別では決してなく、ありふれたことなのである。もちろん、先に述べたような苦労はあるし、合わないと感じる人も中にはいるであろうと思う。それでも、留学に少しでも興味があるのなら、まず一度『虎穴』に入ってみることをお勧めしたい。

**人間健康科学系専攻・人間健康科学科
平成 29 年度入学試験結果 及び 平成 28 年度修了・卒業者数**

平成 29 年度 医学部人間健康科学科入学試験結果

コース・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース	特色	20	33	15	15
先端リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	特色	5	16	5	5
先端リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	特色	5	7	5	5
一 括	一般	70	307	81	78
合 計		100	363	106	103

平成 29 年度 医学研究科人間健康科学系専攻 (修士課程)

入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース 【高度実践助産学系 (内数)】	28 【10】	29[3] 【15[0]】	18[1] 【10[0]】	17[0] 【10[0]】
検査技術科学コース	13	34[1]	28[0]	27[0]
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	4	16[1]	12[1]	11[1]
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	4	13[2]	9[1]	9[1]
合 計	49	92[7]	67[3]	64[2]

[]の数、社会人特別選抜 (内数)

平成 29 年度 医学研究科人間健康科学系専攻 (博士後期課程)

入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	12	6	6
検査技術科学コース		6	4	4
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)		10	9	9
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)		5	4	4
合 計	15	33	23	23

平成 28 年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専攻	卒業生数
看護学専攻	54
検査技術科学専攻	44
理学療法学専攻	15
作業療法学専攻	22
合計	135

平成 28 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	24 【10】
検査技術科学コース	19
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	13
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	6
合計	62

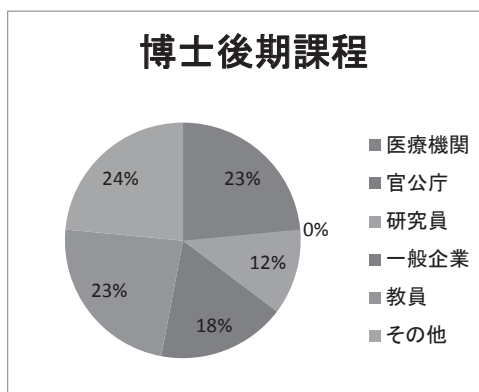
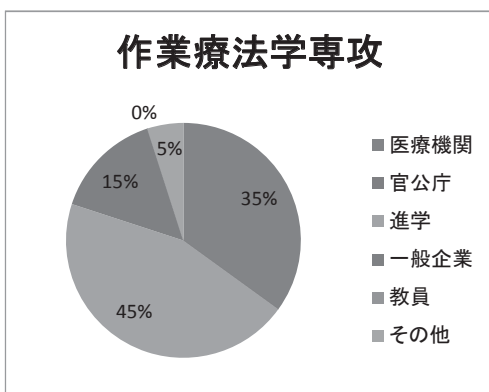
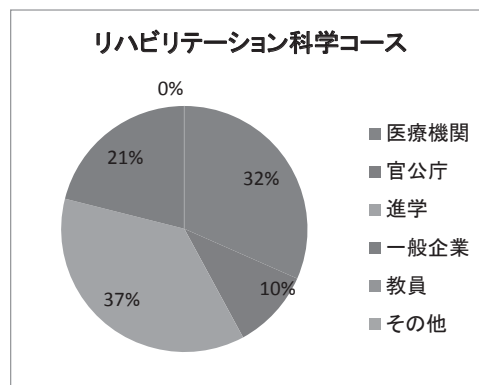
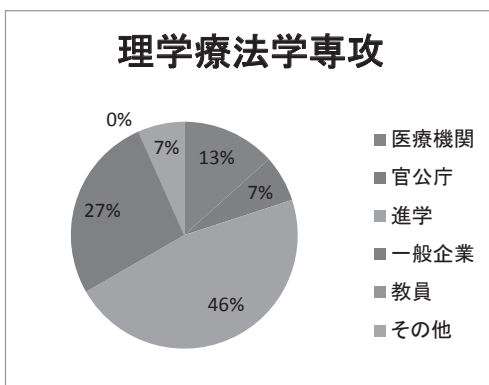
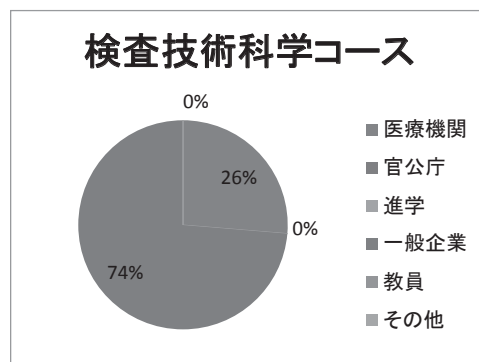
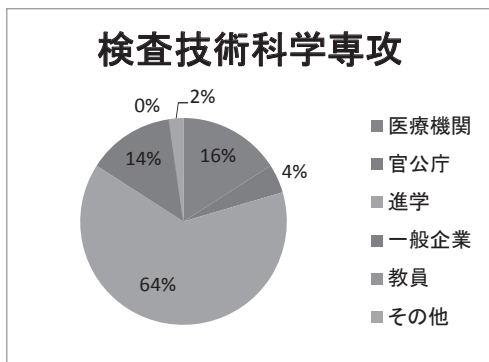
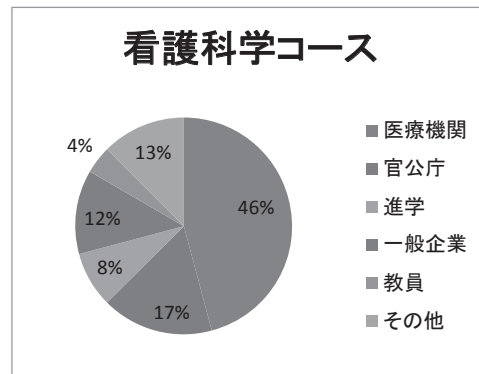
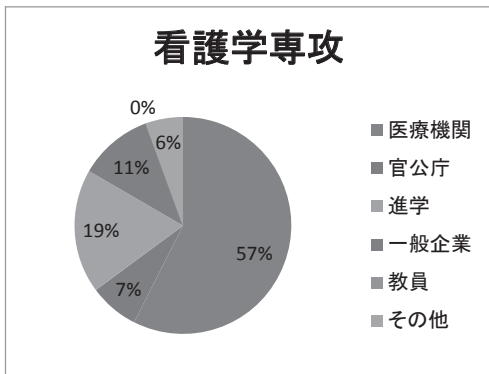
平成 28 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース	1
検査技術科学コース	6
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	2
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	1
合計	10

平成28年度(平成29年3月) 卒業・修了生の進路調査結果

■学部

■大学院(修士)



人 事 異 動

発令年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
28.5.15	講 師	内海 桃絵	看護科学コース	辞職
28.8.1	教 授	奥野 恭史	看護科学コース	採用
28.8.1	教 授	恒藤 暁	看護科学コース	採用
28.9.30	主 事	泉森 嘉宏	事務部	医学・病院構内共同事務部経理・研究協力課へ
28.10.1	准教授	池添 冬芽	リハビリテーション科学コース	昇任（講師より）
28.10.1	特定准教授	荒木 望嗣	味覚分子構造科学講座	採用
28.10.1	特定助教	岩田 浩明	味覚分子構造科学講座	採用
28.10.1	特定研究員	仲嶋 なつ	看護科学コース	採用
28.10.1	特定研究員	鎌田 真由美	看護科学コース	採用
28.10.1	特定研究員	浜中 雅俊	看護科学コース	採用
28.10.15	特定研究員	仲嶋 なつ	看護科学コース	辞職
28.12.31	助 手	増田 さやか	看護科学コース	育児休業代替期間満了
29.3.1	助 教	清水 彬礼	看護科学コース	採用
29.3.31	教 授	我部山 キヨ子	看護科学コース	定年退職
29.3.31	特定研究員	浜中 雅俊	看護科学コース	任期満了
29.3.31	総務掛主任	中西 静治	事務部	施設部環境安全保健課へ
29.3.31	総務掛主任	和村 充二	事務部	桂地区（工学研究科）総務課へ
29.3.31	教務掛主任	大槻 温子	事務部	桂地区（工学研究科）教務課へ
29.4.1	教 授	古田 真里枝	看護科学コース	昇任（准教授より）
29.4.1	准教授	白井 由紀	看護科学コース	採用
29.4.1	准教授	谷向 仁	リハビリテーション科学コース	採用
29.4.1	助 教	片山 泰佑	看護科学コース	採用
29.4.1	助 教	井沢 知子	看護科学コース	採用
29.4.1	特定准教授	福間 真悟	検査技術科学コース （科学技術人材育成コン ソーシアム構築事業）	採用
29.4.1	特定助教	小島 諒介	看護科学コース(A M E D)	採用
29.4.1	特定研究員	藤原 大	看護科学コース(C R E S T)	採用

日 誌 (H 28.4 ~ H 29.3)

28.4.4	総合医療科学 WG	7.27	臨時教授会
4.5	修士課程 1 回生ガイダンス	7.28	執行部会議
4.6	博士後期課程 1 回生ガイダンス		LIMS 教授会
4.7	学部入学式		医学研究科専攻長会議
	学部新入生ガイダンス	8.4	病院協議会
	大学院入学式	8.9	オープンキャンパス
	病院協議会	8.23	大学院修士課程入学試験
4.14	執行部会議	8.25	臨時執行部会議
	医学研究科将来計画検討委員会		臨時教授会
	医学研究科会議・医学教授会		
4.18	拡大執行部会議	9.1	病院協議会
4.19	医系懇談会		教務・教育委員会
4.21	LIMS 教授会	9.8	執行部会議
	教員会議		臨時教授会
	教授会・学系会議		医学研究科将来計画検討委員会
4.28	医学研究科専攻長会議		医学研究科会議・医学教授会
		9.9	全学教育シンポジウム
5.10	臨床実習指導者会議		大学院修士課程入学試験合格発表
	[リハビリテーション科学コース (作業)]	9.12	拡大執行部会議
	病院協議会	9.15	LIMS 教授会
5.12	執行部会議		教員会議
	医学研究科会議・医学教授会		教授会・学系会議
5.16	拡大執行部会議	9.16	医学部遺骨返還式
	第 53 回国立大学臨床検査技師教育協議会	9.23	執行部会議
5.19	LIMS 教授会		医学研究科専攻長会議
	教員会議		京大関係病院長協議会定例総会
	教授会・学系会議		五〇会 (秋の会)
5.21	大学院説明会 [検査技術科学コース]	10.6	執行部会議
	大学院説明会		病院協議会
	[リハビリテーション科学コース (理学)]		教務・教育委員会
	大学院説明会	10.7	臨時教授会
	[リハビリテーション科学コース (作業)]	10.13	医学研究科将来計画検討委員会
5.26	執行部会議		医学研究科会議・医学教授会
	医学研究科専攻長会議	10.17	拡大執行部会議
5.28	大学院説明会 [看護科学コース]	10.20	解剖体祭
			医系懇談会
6.2	LIMS 教授会		LIMS 教授会
	病院協議会		教員会議
	教務・教育委員会		教授会・学系会議
6.6	第 11 回国立大学保健医療学系代表者協議会		臨時執行部会議
6.9	執行部会議	10.27	執行部会議
	医学研究科会議・医学教授会		医学研究科専攻長会議
6.13	拡大執行部会議		臨時教授会
6.15	臨時執行部会議		
6.16	LIMS 教授会	11.1	大学院博士後期課程入学試験
	教員会議	11.5	京都大学ホームカミングデー
	教授会・学系会議		第 29 回健康科学市民公開講座
6.18	創立記念日	11.8	病院協議会
6.23	執行部会議	11.10	執行部会議
	医学研究科専攻長会議		医学研究科将来計画検討委員会
7.1	第 62 回国立大学法人助産師教育専任教員会議		医学研究科会議・医学教授会
7.7	病院協議会		教務・教育委員会
	教務・教育委員会	11.12-13	特色入試第 2 次選考
7.14	執行部会議	11.14	拡大執行部会議
	医学研究科将来計画検討委員会	11.17	入試委員会
	医学研究科会議・医学教授会		特色入試委員会
	臨時教授会		LIMS 教授会
7.19	拡大執行部会議		教員会議
	医系懇談会		教授会・学系会議
7.21	教員会議		臨時執行部会議
	教授会・学系会議	11.19	11 月祭 (~ 22 日)
	臨時執行部会議	11.21	執行部会議
7.22	医学研究科懇談会		

日 誌

11.24	卓越大学院（仮称）構想検討 WG 医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会	2.17	臨時執行部会議 五〇会総会
11.25	博士後期課程入試合格発表	2.23	執行部会議 医学研究科専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
12.1	臨床実習指導者会議 [リハビリテーション科学コース（理学）] 病院協議会	2.25	学部入試（～26日）
12.8	医学研究科会議・医学教授会 教務・教育委員会	3.2	病院協議会 教務・教育委員会
12.9	執行部会議	3.9	執行部会議 臨時教授会・学系会議 医学部教授会 医学研究科専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
12.12	拡大執行部会議	3.10	学部入試合格発表
12.13	教員会議 教授会・学系会議	3.13	拡大執行部会議
12.15	LIMS 教授会	3.14	臨時拡大執行部会議
12.19	臨時学系会議	3.16	教員会議 教授会・学系会議
12.20	臨時学系会議	3.17	LIMS 教授会
12.22	執行部会議 医学研究科専攻長会議 医学部教授会	3.23	執行部会議 修士・博士学位授与式 修了を祝う会
12.28	KUROME	3.24	学部卒業式 卒業を祝う会 医学研究科専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学教授会
29.1.4	新年挨拶会		
1.5	教務・教育委員会 病院協議会		
1.12	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会		
1.14	大学入試センター試験（～15）		
1.16	拡大執行部会議		
1.19	LIMS 教授会 教員会議 教授会・学系会議		
1.20	医系懇談会		
1.26	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会 医学新春懇談会		
2.1	執行部会議 高度医療専門職大学院シンポジウム		
2.2	病院協議会		
2.9	医学研究科会議・医学教授会		
2.10	特色入試最終合格発表		
2.13	拡大執行部会議		
2.14	臨時拡大執行部会議		
2.16	LIMS 教授会 教務・教育委員会 教員会議 教授会・学系会議		

あとがき

本年も無事に広報をお届けする事ができました。本誌では、本学科を取り巻く組織改革や人事異動を皆様に正確にお伝えするとともに、学位取得者の声や開催行事などもご紹介したいと思っております。特に近年は、京都大学交流会やオープンキャンパスなど、本学科の授業や研究を周知するためのプロモーション活動を積極的に行っております。今後ともお力添えの程、どうぞよろしくお願い致します。

（奥野 恭史）

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町 53 <http://www.med.kyoto-u.ac.jp/>